

特別陳列

鳥居龍蔵とアイヌ

— 北方へのまなざし —



開拓使蔵板



開催にあたって

鳥居龍蔵記念博物館のより一層の活性化を図るために組織した、鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会では、文化庁の支援をいただき、この特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌー 北方へのまなざしー」を開催することになりました。

鳥居龍蔵は、1899（明治32）年に千島列島で、そして1912（明治45・大正元）年と1921（大正10）年にサハリンで調査し、アイヌなど、日本の北方にくらす民族の生活文化などの比較研究をしました。また、故郷徳島の城山貝塚を含む日本各地で発掘調査を行ない、石器時代（縄文時代）の遺跡を「アイヌの遺蹟」ととらえました。

この特別陳列では、約100年前に鳥居龍蔵が収集した北方民族に関する資料をご覧いただくとともに、日本人類学黎明期のアイヌ研究や、現代にいたるアイヌ民族の歴史と文化についても紹介します。

開催にあたり、文化庁、国立民族学博物館、財団法人千里文化財団、宇都宮大学廣瀬隆人研究室をはじめ、多くの方々に御協力を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

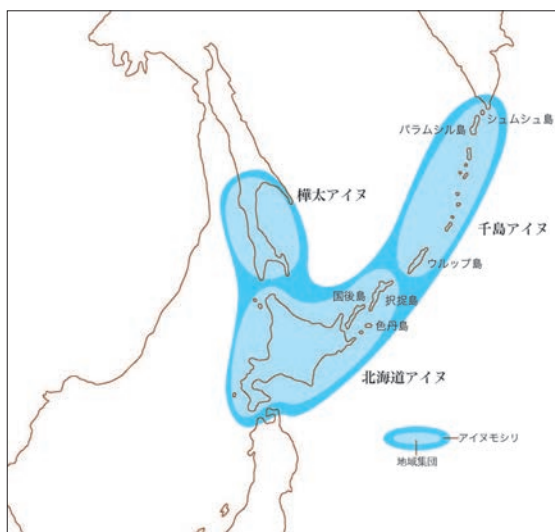
平成25年1月

鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会会長 高島 芳弘



とりい りゅうぞう
鳥居 龍蔵 (1870-1953)

鳥居龍蔵は、1870（明治3）年に現在の徳島市東船場町で生まれた人類学・民族学・考古学の研究者です。20歳で上京、東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎つばいしごろうに師事しました。そして、日本国内はもとより、台湾、中国西南部、中国東北部、朝鮮半島、シベリア、サハリン、千島列島など、東アジア各地のさまざまな民族の言語、習慣、生活文化を調査したり、遺跡の発掘調査をしました。その調査成果を膨大な数の著作にまとめています。なお、1921（大正10）年には「満蒙の有史以前」で文学博士の学位を授与されました。



19世紀ころのアイヌの居住地
大塚和義編（1993）所収の図を改変

<アイヌ民族>

言語をはじめ文化的に大きく3つに分けられる。

千島アイヌ(クリールアイヌ) シュムシュ島からウルツプ島にかけての千島列島北部を居住地・狩猟場としていたアイヌの人々。1875(明治8)年、日露間で樺太千島交換条約が締結された後、1884年に、97名のすべてのアイヌが、色丹島に移住させられた。生活環境の急激な変化などにより、人口が激減し、現在は千島アイヌのアイデンティティを表明する人はほとんどいない。

樺太アイヌ(サハリンアイヌ) 樺太(サハリン)南半分に住んでいたアイヌの人々。樺太千島交換条約にもない、人口のおよそ3分の1にあたる841人が北海道への移住を余儀なくされたが、慣れない土地での集住により約半数が命を落とし、日露戦争後の1905(明治38)年に日本領となった樺太南部に帰れた者は300人余りであ

った。そして、再び1945(昭和20)年の日本の敗戦を契機として、北海道に移住した者が多い。

北海道アイヌ 北海道、択捉島、国後島、色丹島に住んできたアイヌの人々(p.15参照)。



絵葉書「(北海道土人風俗)アイヌの熊祭 幼より養ひ成長するに及び熊を殺す光景なり」 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵



絵葉書「北海道土人風俗 第一集(2)」 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵

上の2枚の絵葉書は、鳥居が収集した、戦前の観光記念用絵葉書。ここに見られる「土人」とは、江戸時代末期頃からアイヌの人々に対して頻繁に用いられるようになったことばである。和人側から見た「その土地の人」という意味で遣われ、差別的なニュアンスが含まれていた。また、1878(明治11)年には開拓使が、アイヌの人々を指す行政用語を「旧土人」と定めた。実際には、2つの用語の違いはあまり意識されずに遣われ続けた。

<アイヌ以外のサハリン先住民>

サハリンには、アイヌ以外の民族も居住している。1905~45年の日本領時代には、研究者らによって調査され、日本化がはかられた。

ニヴフ アムール川(黒龍江)下流域からサハリン北部にかけて居住してきた民族。かつてはギリヤークと呼ばれた。漁労と海獣類の狩猟を主な生業としてきた。

ウイルタ サハリン中部のツイミ川・ポロナイ川流域からタライカ湾にかけて居住してきた民族。かつてはオロッコと呼ばれた。漁労や狩猟を主としつつトナカイ飼育も行っていた。

I. 北方へのまなざし

明治になるまで、アイヌの住んでいた地域は、「蝦夷地」と呼ばれていた。交易品や、松浦武四郎、岡本韋庵ら探検家の著作物などを通して、アイヌに対するイメージが間接的に形成されていった。

(1) 「蝦夷地」という空間

江戸時代になるまで、アイヌの人々は、狩猟、漁労、採集を基盤にしつつ、本州以南の人々（和人）等との交易を活発に行っていた。しかし、江戸時代には、松前藩の管理下に置かれるようになり、アイヌの社会は大きく変化した。

蝦夷地からは海産物や毛皮、北蝦夷（サハリン）を経由した中国産品などが移出され、本州からは鉄製品、漆器、酒などがもたらされた。こうした交易を担ったのが、アイヌの人々であった。しかし、次第に自由な交易は制限され、漁場での労働を余儀なくされるようになった。

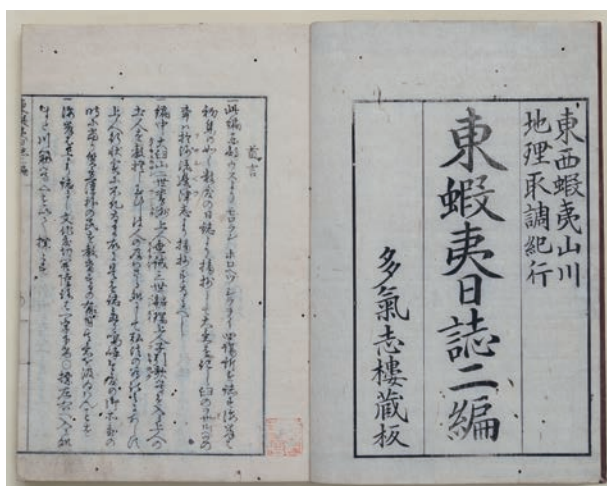
18世紀後半以降、ロシアの蝦夷地進出に対し、幕府は、蝦夷地の大部分を幕府の直轄領としたり、近藤重蔵（1771-1829）らに蝦夷地調査を行なわせたりした。その後、日露修好通商条約（1858）、樺太千島交換条約（1875）の締結により、国境が確定された。これらにより、アイヌをはじめとする諸民族の世界が分断された。



北海道国郡図 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1869(明治2)年、開拓使発行。この年、開拓使が設置され、蝦夷地は北海道と改称された。

(2) アイヌをめぐる情報とイメージ

江戸時代の後半に、幕府役人の最上徳内（1755-1836）による『蝦夷草紙』などの記録、探検家の松浦武四郎（1818-1888）による紀行文、絵師によるアイヌの風俗を描いた絵など、アイヌに関する情報が増加した。これらを通じて、和人はアイヌの人々の姿や生活を想像したが、アイヌ社会の実情を十分に理解してはいなかった。



東蝦夷日誌 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1865(慶応元)年刊。松浦武四郎著



蝦夷漫画 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1859(安政6)年刊。松浦武四郎著

(3) 阿波の先人・岡本韋庵とサハリン

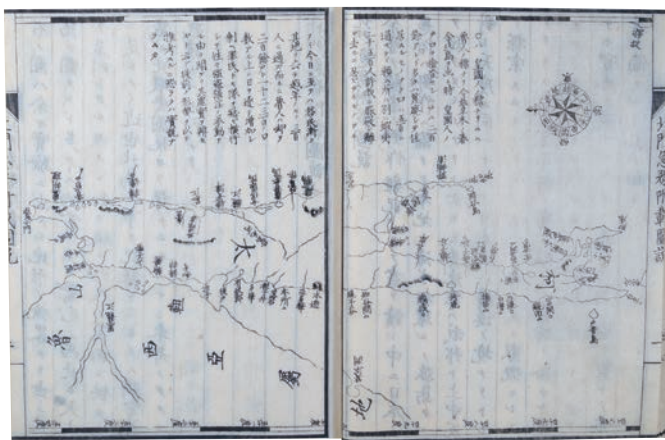
岡本韋庵 (1839-1904) は、美馬郡三谷村 (美馬市穴吹町三谷) の生まれ。幼名文平、後に監輔。徳島城下の岡本贅庵に師事した後、高松の藤川三溪の書生となる。この時、北蝦夷 (サハリン) の話を聞き、北方への関心を深めたという。その後、江戸に出て間宮林蔵の『北蝦夷図説』を読み、松浦武四郎とも知り合い、北蝦夷探検を強く志すことになった。そして、1863 (文久3) 年に初めてサハリンに渡った。

明治新政府のもとでも函館裁判所権判事として北海道に居住するとともに、入植者を募ってサハリンの開拓を試みた。しかし、ロシアの南下が進んだことから1871 (明治4) 年にはサハリンを引き揚げた。そして、『北門急務』を著してロシアへの備えの必要性を説いた。

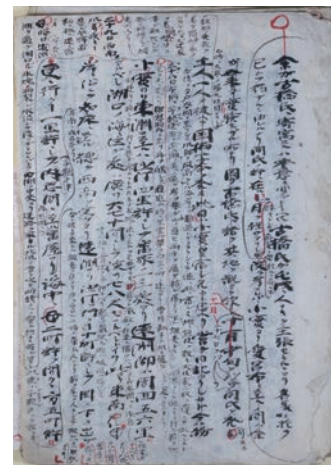
それでも北方開拓の夢は断ちがたく、1891年には択捉島に現況を見聞している。そして、帰京した直後に「千島義会」を立ち上げて千島への開拓団 (移民) を募るとともに「千島開拓請願」を提出したが、政府には受け入れられなかった。1893年に郡司成忠 (1860-1924) が千島開拓のため「報効義会」(p.11参照) を結成したことを知ると、すぐさま参加を望んだが、実現はしなかった。



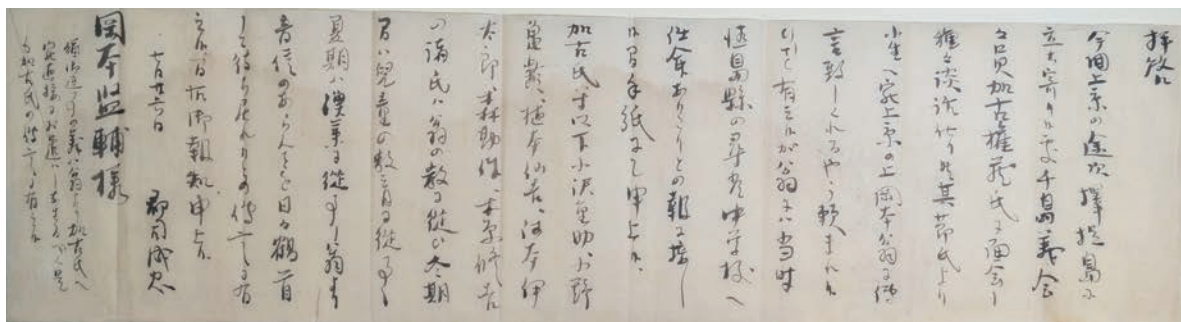
岡本韋庵 北海道大学附属図書館蔵
「明治・大正期の北海道 (写真編)」からの転載



北門急務 徳島県立図書館蔵
1871 (明治4) 年刊



北蝦夷新志 徳島県立図書館蔵



岡本韋庵宛郡司成忠書翰 徳島県立図書館蔵
1896 (明治29) 年7月26日付。千島義会の会員からの依頼を受けた郡司が、当時徳島中学校長であった岡本へ宛てた書翰

II. 黎明期の人類学とアイヌ研究

明治から大正にかけて成立してきた人類学の、主要な課題の一つとして、「石器時代人」を解明することがあった。これをめぐってコロボックル・アイヌ論争が起こった。鳥居龍蔵の千島アイヌの調査結果やコロボックル主唱者であった坪井正五郎^{つばいしょうごろう}の死により、この論争は終息していった。

(1) ヨーロッパ人のアイヌへの視線

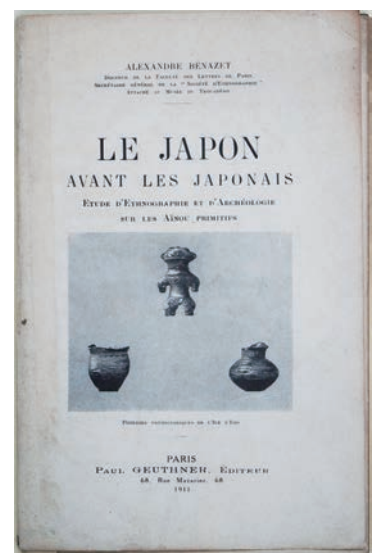
江戸時代後期に来日したドイツ人医師のP.F.V.シーボルト（1796-1866）が、最上徳内や間宮林蔵の著作を紹介した『日本』（1832~1851年）を著した。また、アイヌはヨーロッパ人と同じ祖先であるという説が広がり、関心が高まっていった。こうした中で、英国人医師のN.G.マンロー（1863-1942）のように、アイヌの資料を収集し、自国に持ち帰る者もいた。



日本亜細亜協会でのマンローの講演記録（部分）
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
発行年不明。1917年に開催された、慶応義塾図書館での講演会の記録



DIE AINOS
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1881年刊、B.Scheube著
ドイツ語で書かれた論文



LE JAPON
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1911年刊、Alexandre Bénézet著
フランス語で書かれた冊子

(2) アイヌ研究を進めた人類学者たち

日本の人類学は、1877（明治10）年、アメリカ人動物学者E.S.モース（1838-1925）による大森貝塚発掘調査を契機に始まった。1884年には、東京帝国大学の学生であった坪井正五郎（1863-1913）らによって、「じんるいがくのとも」という研究グループ（1886年、東京人類学会と改称）が設立された。この時期以降、坪井をはじめ、^{こがねいよしきよ}小金井良精（1858-1944）、^{いしだいしろう}石田収蔵（1879-1940）、鳥居龍蔵らがアイヌ研究を進展させた。

坪井正五郎は、東京帝国大学理科大学に入学し動物学を学んだ。大学院に進学後、人類学に転じた。イギリスに留学後、東京帝国大学初の人類学講座教授となる。主な業績は、日本に人類学会を創立し、普及に努めたこと、日本の石器時代研究を進展させたことである。

小金井良精は、東京帝国大学医学部を卒業し、ドイツに留学後、東京帝国大学医科大学教授となった。各地の貝塚などの発掘調査に携わり、解剖学者として日本石器時代人骨の研究に多大な業績をあげた。

石田収蔵は、東京帝国大学理科大学卒業後、大学院で坪井正五郎のもとで勉学し、調査にも同行している。東京人類学会の幹事や機関誌の編集者としても活動した。

国立民族学博物館蔵のアイヌ関係資料

<北海道アイヌ>



盆 浜尾新収集



皿 坪井正五郎収集



首飾り 収集者不明

<樺太アイヌ>



小刀鞘 坪井正五郎収集



手袋 坪井正五郎収集

(3) コロボックル・アイヌ論争

日本の石器時代の住人を解明することが、黎明期の日本人類学にとって重要な課題の一つとされた。この問題をめぐって、坪井正五郎がコロボックル説を主張した。これに対し、白井光太郎と小金井良精がアイヌ説を唱えた。これを「コロボックル・アイヌ論争」と呼ぶ。

コロボックル説は、コロボックル（アイヌ語のコロボウシクルは「^{フキ}路の下にいる人」という意味。アイヌの伝説に出てくる小人）を日本石器時代の住人とする。コロボックルは、アイヌより以前から北海道に住んでおり、竪穴式住居に住み、石器や土器を製作・使用したと言われた。アイヌと交易があったが、ある時期突然姿を消してしまったとされていた。

アイヌ説は、石器時代の住人はアイヌであるという説である。アイヌは昔、竪穴式住居に住み、石器や土器を使っていたと言われた。北海道で出土する土器と同様のものが、本州以南でも発見されることなどを根拠とした。



1899（明治32）年、鳥居龍蔵による千島列島調査の結果、コロボックル論者の主張とは異なり、千島アイヌは竪穴式住居に住み、石器や土器を製作していたことが確認された。これにより、石器時代人はアイヌであるとする説が有力になっていった。しかし、この論争は結論に至らず、坪井の急逝により終息を迎えた。

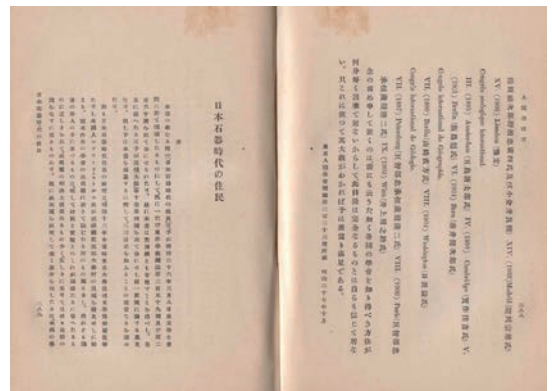
なお、現在では、縄文文化は日本列島全域にひろがっていたが、本州の弥生文化期以降に北海道は独自の展開をし、アイヌ文化が生まれたことがわかっている（p.15 参照）。

日本旧土人「コロボックル」石斧ヲ研ギ獸肉ヲ煮ル図

東京大学総合研究博物館蔵 撮影：上野則宏氏
1893（明治26）年出版。坪井の助手としてスケッチを担当した大野雲外が描いた想像図。
ここでいう「旧土人」は、アイヌを指すのではなく、坪井が石器時代人とみなしたコロボックルと同義である。坪井は、「太古我が日本国ノ地ニ住シタル未開人ノ状態ヲ推測シテ画キタルモノ」と記しており、「文明」に足場を置く人類学者の視線が知られる。



坪井の論文を掲載した東京人類学会雑誌
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵



人類学研究 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1926（大正15）年刊。小金井良精著
1904（明治37）年に発表された「日本石器時代の住民」
（『東洋学芸雑誌』259号）が収められている。

(4) コロボックル・アイヌ論争以後

コロボックル・アイヌ論争終息後、アイヌ説が定説化していく中で、鳥居は、『有史以前の日本』（1918年）を著し、アイヌが「石器時代人」とであるとする立場から日本民族起源論を展開した。このアイヌ説の立場から調査した代表的な遺跡に徳島市の城山貝塚がある。

1922（大正11）年、徳島県内の調査をしていた鳥居龍蔵は、^{まえだしょういち}前田正一（1892-1955）から徳島城跡での公園工事中に貝が出土したという報告を受けて、同年4～5月に発掘調査を行なった。これが城山貝塚であった。この調査には、前田の他に、^{もりけいすけ}森敬介（1888-1947）、^{いのうえたつぞう}井上達三（1867-1928）らが協力した。また、人骨調査には、東京帝国大学の小金井良精が参加した。鳥居は3ヶ所発掘調査を行ない、貝塚1ヶ所、石器時代住民住居跡の洞窟、ドルメンを発見したと報告した。出土遺物には、縄文土器（鳥居は「アイヌ土器」と報告）、弥生土器、緑色片岩製の石器、ハマグリ、カキ、アサリなどの貝、魚や獣の骨などがあつた。他に、屈葬の人骨が2体あり、このうち、1体のそばで石斧、石包丁、貝輪が出土した。発掘成果は『人類学雑誌』第421号、第422号（1922年）などに発表されている。



城山2号貝塚から出土した貝類 東京大学総合研究博物館蔵



城山3号貝塚出土遺物 東京大学総合研究博物館蔵



城山1号貝塚 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
鳥居龍蔵の調査時に撮影された写真



城山3号貝塚 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
鳥居龍蔵の調査時に撮影された写真

郷土史家の残した城山貝塚関連資料

鳥居龍蔵と共に城山貝塚の調査に参加した森敬介、前田正一、井上達三らの関連資料が、徳島県立図書館や徳島県立鳥居龍蔵記念博物館に残されている。

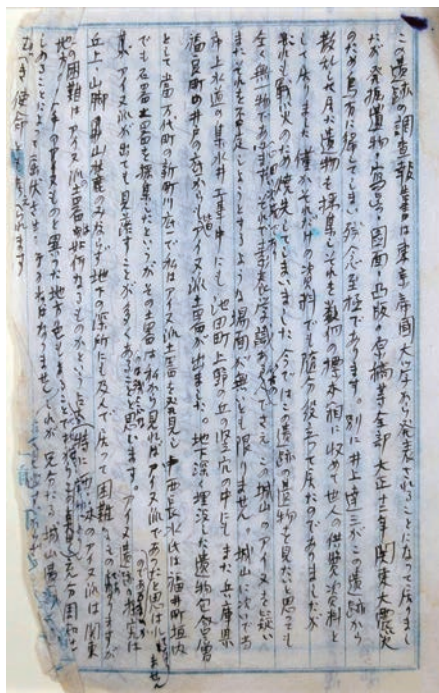
森敬介は、鳥居龍蔵の城山貝塚発掘調査に協力し、東京帝国大学で城山貝塚の出土遺物の整理作業を手伝った。帰県後、徳島人類学会や阿波郷土会で活躍した。前田正一は、鳥居の調査のきっかけを作り、発掘調査も手伝った。後、阿波郷土会員として活躍した。井上達三は、徳島市会議員として、城山貝塚発掘に尽力し、親子で参加した。鳥居の朝鮮半島調査に同行し、写真撮影を行なったこともある。



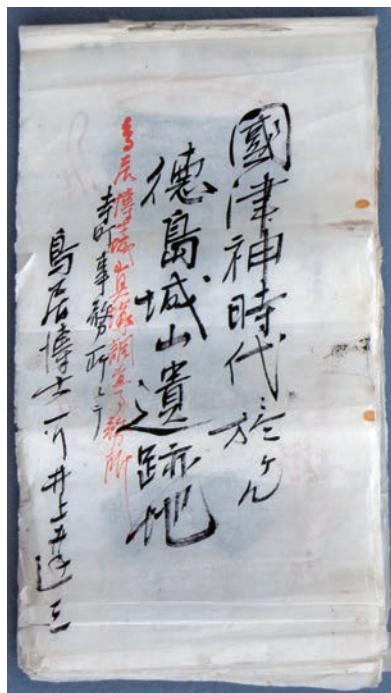
徳島公園城山遺跡遺物集 徳島県立図書館蔵
森敬介が作成した拓本集。縄文土器を「関東アイヌ派土器」と記述



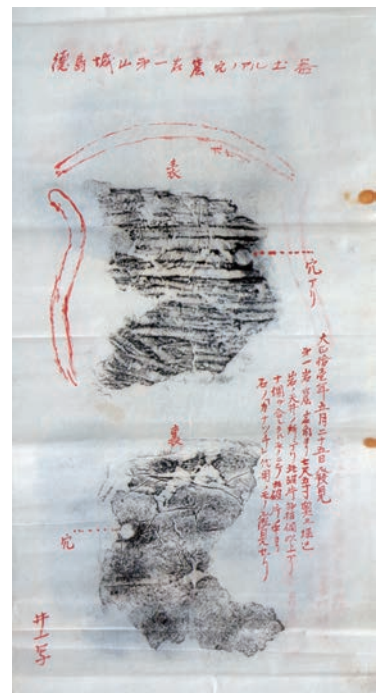
徳島公園第2貝塚遺物集 徳島県立図書館蔵
森敬介が作成した資料集。上の図は、3号貝塚の断面図



徳島公園古代遺跡整理案 徳島県立図書館蔵
前田正一60歳の時のもの



国津神時代ニ於ケル徳島城山遺跡地
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
井上達三がまとめた拓本集と所感記



Ⅲ. 鳥居龍蔵の見たアイヌとサハリン先住民

鳥居龍蔵は、およそ100年前に千島列島やサハリンで、精力的に人類学調査を行なった。千島アイヌのものをはじめ、彼の収集資料には、現在失われたものが多く含まれている。

(1) 千島列島調査

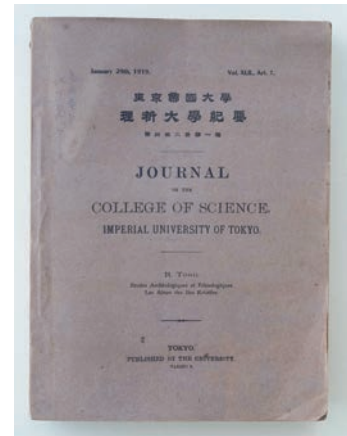
1899（明治32）年、千島列島最北端のシュムシュ島に入植していた報効義会会長郡司成忠から、坪井正五郎に対して竪穴式住居の調査要請があった。鳥居は、坪井の指名により千島列島に派遣された。函館港で警備艦武蔵に乗艦し、色丹島に到着後、助手として千島アイヌのグレゴリーを雇った。択捉島からシュムシュ島まで島々の調査を行なった。シュムシュ島で竪穴式住居の調査後、色丹島にまで引き返し、約1ヶ月間にわたり、色丹島へ移住させられていた千島アイヌ62名の体質、言語、生活文化など多岐にわたり調査を行ない、民族資料の収集も行なった。調査成果を「千島アイヌ」（1903年）、フランス語論文「考古学民族学研究・千島アイヌ」（東京帝国大学理科大学紀要第42冊第1編、1919年）などとして出版した。これらの中で、千島アイヌは竪穴式住居に住み、近年まで石器や土器を製作・使用していたこと、コロボックルは伝説上の存在であるということを発表し、当時のコロボックル・アイヌ論争に一石を投じた（p.8参照）。鳥居が収集した民族資料には、現在は失われたものが多く、貴重である。



千島列島の調査ルート



千島アイヌ
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1903（明治36）年刊



東京帝国大学理科大学紀要第42冊第1編
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1919（大正8）年刊



警備艦武蔵の艦上で踊る千島アイヌの女性
東京大学総合研究博物館蔵
1899（明治32）年、鳥居龍蔵撮影



海鳥エトピリカの皮製服（ウル） 東京大学総合研究博物館蔵



人形（ニボンボン） 東京大学総合研究博物館蔵



船 模型 国立民族学博物館蔵



帯飾り（ククルケシ） 東京大学総合研究博物館蔵



仮面 模型（スペラロム）
国立民族学博物館蔵



籠 国立民族学博物館蔵



針刺し（ケモオク） 国立民族学博物館蔵

（ ）内は、鳥居龍蔵の収集時の名称

(2) サハリン調査

鳥居龍蔵のサハリンへの関心は、サハリンで民族調査をしていたポーランド人のB.ピウスツキ（1866-1918）との親交をきっかけに、高まったと考えられている。

日本がサハリン南部の統治のために設置していた樺太庁の援助を受け、鳥居は、1912（明治45・大正元年）7～8月、鈴谷貝塚での発掘調査、敷香（ポロナISK）に流れ込むポロナイ川流域でのニヅフとウイルタ、樺太アイヌの民族調査を行なった。1921（大正10）年には、サハリン北部で、ニヅフとウイルタの民族調査を行なった。

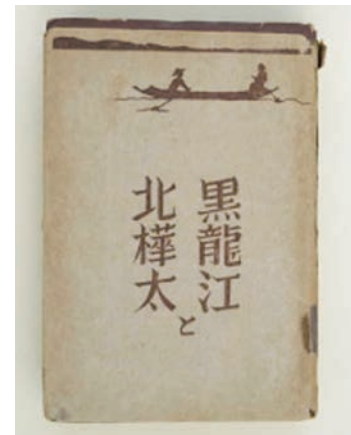
サハリン調査の成果は、『人類学及び人種学上より見たる北東亜細亞』（1924年）、『黒龍江と北樺太』（1943年）などにまとめられている。



サハリンの調査ルート



玩具人形 国立民族学博物館蔵
鳥居龍蔵収集



黒龍江と北樺太
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
1943（昭和18）年刊



鳥居龍蔵が寄稿した雑誌
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵
千島列島やサハリン調査の結果についての論
考が掲載されている。

(3) 東京大学総合研究博物館蔵の千島列島・サハリンの考古・民族資料

<千島列島>



内耳土器 シュムシュ島
鳥居龍蔵収集 鉄鍋に先行して使用された土器



骨鏃 シュムシュ島
鳥居龍蔵収集



ガンフリント シュムシュ島、カムチャツカ半島
鳥居龍蔵収集 銃の部品 (発火具)

<サハリン>



打製石斧 鳥居龍蔵収集
「大正十年四月廿一日於 北樺太亜港山上得之 岳六波」と注記される。亜港は、現在のアレクサンドロフスク・サハリンスキー



甕 鳥居龍蔵収集



彫刻のある骨製針入れ
坪井正五郎、石田収蔵、野中完一収集

IV. アイヌ民族の歴史と文化

アイヌの人々は、独自の言語であるアイヌ語や独特のアイヌ文様などで知られている民族である。アイヌ民族とその文化は、北海道をはじめ、東北地方北部、サハリン、千島列島及びその周辺での人々の往来や同化、変容の中で形成されたと考えられている。

北海道では、縄文文化の後、続縄文文化へと続き、その後、本州文化の影響を強く受けた擦文文化が、またオホーツク海沿岸では北方系のオホーツク文化が、それぞれ成立した。アイヌ文化は、擦文文化を直接の母胎として、オホーツク文化の影響も受けながら、12～13世紀に成立したとみられている。

以後、アイヌの人々の生活や文化が変わらず、今に至っているわけではない。和人など周辺の諸民族との交流の中で、独自の文化がはぐくまれていった。また、江戸時代における松前藩による統制や明治時代以降の和人への同化政策といった困難に直面した時期には、伝統的な文化が危機的な状況に追い込まれたこともあった。これらを含めた変容が積み重ねられてきたのである。

1945（昭和20）年日本の敗戦以降、民族的自覚の高まりとともに、伝統の継承・保存が進められてきた。1997（平成9）年、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が制定されてからは、アイヌ文化の振興・継承にいつそうの支援がなされるようになった。これにとともに、アイヌ文化はアイヌの人々だけにとどまらず、広く受け入れられるようになってきている。

なお、2008年には国会で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択され、政府も公式見解としてアイヌ民族を先住民族とする認識を発表した。

私たちには、アイヌの人々の歴史と文化を学び、理解することが求められているとあってよいだろう。

■廣瀬コレクション

各地でアイヌの人々の歴史や文化を啓発する取り組みが行われている。その中で、宇都宮大学生涯学習教育研究センター教授の廣瀬隆氏は、アイヌの衣食住などに関する実物資料を精力的に収集・活用しており、注目される。毎年、コレクションの展示会を催すことで、学生や地域住民に対し、アイヌ文化の普及啓発をとおして、人権教育を進めている。

コレクションの中には、かつてのアイヌの暮らしの中で用いられたものとともに、北海道日高地方在住のアイヌ工芸家浦川太八氏の作品など、現代の工芸品も含まれており、伝統の継承の様子がうかがえる。

西暦	日本史の一般的な時代区分	北海道の文化
BC8000	旧石器	旧石器文化
	縄文	縄文文化
AD100	弥生	
	200	続縄文文化
300		
400	古墳	
500		
600	奈良	オホーツク文化
700		
800	平安	アイヌ文化
900		
1000	鎌倉	
1100		
1200	南北朝	和人文化
1300		
1400	室町	
1500		
1600	安土桃山	
1700	江戸	
1800		
1900	明治	

アイヌ民族博物館「アイヌの歴史と文化」(概説) (<http://www.ainu-museum.or.jp/nyumon/rekishibunka/index.html>)、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌの人たちとともに』などに掲載の図をもとに作成した。



小刀 マキリ
宇都宮大学廣瀬隆人研究室蔵
浦川太八氏が制作した作品の一例

関連行事

- (1) ギャラリートーク①
日時 1月26日(土) 13:30~14:30 会場 企画展示室
講師 齋藤玲子氏(国立民族学博物館 助教/特別陳列監修協力者)
- (2) ギャラリートーク②
日時 2月3日(日) 13:30~14:30 会場 企画展示室
講師 当館学芸員
- (3) ギャラリートーク③
日時 2月23日(土) 13:30~15:00 会場 企画展示室
講師 廣瀬隆人氏(宇都宮大学 教授)、当館学芸員
- (4) 記念講演会「鳥居龍蔵が会った北方世界—先住民族の虚像と実像」
日時 2月17日(日) 13:30~15:00 会場 文化の森イベントホール
講師 佐々木史郎氏(国立民族学博物館 教授)
- (5) ワークショップ①「手作りカメラ体験」
日時 2月11日(月・祝) 10:00~11:30、13:30~15:00
定員 各回20名 ※小学生は保護者同伴(2階常設展前にて受付)
- (6) ワークショップ②「アイヌ文化を体験しよう—食文化に親しむ」
日時 2月24日(日) 10:00~12:00 会場 実習室
定員 30名 ※小学生は保護者同伴(事前申し込み)
講師 高尾戸美氏(MarbleWorkshop代表)
- (7) ワークショップ③「アイヌ文化を体験しよう—文様に親しむ」
日時 2月24日(日) 13:00~14:00 会場 実習室
定員 30名 ※小学生は保護者同伴(事前申し込み)
講師 高尾戸美氏(MarbleWorkshop代表)

ワークショップ②または③に参加ご希望の方は往復はがきに、希望する行事名、参加希望者全員の氏名・学年、住所、電話番号を書いて、鳥居龍蔵記念博物館までお送りください。2月14日(木)必着。希望者多数の場合は抽選します。

主要参考文献

阿波学会・岡本韋庵調査研究委員会 2004

- 『阿波学会五十周年記念 アジアへのまなざし岡本韋庵』阿波学会・岡本韋庵調査研究委員会
大塚和義編1993『アイヌモシリ 民族文様から見たアイヌ世界』財団法人千里文化財団
国立民族学博物館1993『民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2011『千島・樺太・北海道 アイヌの暮らし』財団法人千里文化財団
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2012『アイヌの人たちとともに』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編1991『乾板に刻まれた世界』東京大学総合研究資料館
徳島県立博物館 1993『徳島の生んだ先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館
鳥居龍蔵1903『千島アイヌ』吉川弘文館(『鳥居龍蔵全集』第7巻)
鳥居龍蔵1918『有史以前の日本』磯部甲陽堂(『鳥居龍蔵全集』第1巻に、1925年発行の増補版所収)
鳥居龍蔵1919『考古学民族学研究・千島アイヌ』(仏文)東京帝国大学理科大学紀要第42冊第1編
(『鳥居龍蔵全集』第5巻に日本語訳所収)
鳥居龍蔵1923「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』16巻5号(『鳥居龍蔵全集』第4巻)
鳥居龍蔵1924『人類学及び人種学上より見たる北東亜細亞』岡書院(『鳥居龍蔵全集』第8巻)
鳥居龍蔵1943『黒龍江と北樺太』生活文化研究会(『鳥居龍蔵全集』第8巻)
鳥居龍蔵1953『ある老学徒の手記』朝日新聞社(『鳥居龍蔵全集』第12巻)

監修協力者 齋藤玲子氏(国立民族学博物館)

協力者(50音順、敬称略)

天羽利夫、宇都宮大学 廣瀬隆人研究室、浦川太八、大原賢二、国立民族学博物館、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、財団法人千里文化財団、佐々木史郎、高尾戸美、東京大学総合研究博物館、徳島県立図書館、鳥居喬、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、北海道大学附属図書館

発行 2013年1月26日

編集・発行 鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会

〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館内
TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197 <http://www.torii-museum.tokushima-ec.ed.jp>

印刷・製本 株式会社 教育出版センター